

くるみ星人より愛を込めて。

作 稲邊弘康

宮本 優希(みやもと ゆうき)

市原 武士(いちばら たけし)

小島 真亜子(こじま まあこ)

冬樹 一美(ふゆき かずみ)

佐久間 文哉(さくま ふみや)

泊 庄太郎(とまり しょうたろう)

くるみ星人より愛を込めて。

幕開く。大学のサークル棟の一室。「SF研究会」の文字が張られている。小汚いが、秩序に沿って片付けられた意図が見える室内。ホワイトボード、長机、パイプ椅子、棚には妖しげな人形、雑誌、漫画、ファイルなど。くずかごは紙で納まりきらず、インクの切れたペンが転がっている。机には携帯がひとつ、置きっぱなしになっている。

#1 達也君と綺麗な空と格ゲーと枯れススキ

机に置いたままの携帯が鳴る。武士、入ってくる。携帯に気づいて話し出す。

武士 もしもし?…ああ、うん。そう、もう決めたから。…うん。じゃあそうしとく。じゃあな。…ああ、わかっているよ。ちゃんとやとくから。親父にもちゃんと伝えてくれよ。…ああ。はいはい。…んじゃ、切るから。ん。

武士、携帯を切る。携帯を懐に突っ込み、溜息。側にあったパイプ椅子を蹴る。音を立てて倒れる椅子。武士、鞆を持って出ていく。

入れ違いに真亜子が教室に入ってくる。誰もいないことを確認して、携帯を持ち出す。達也の番号を呼び出すが。

真亜子 あー、やっぱりドキドキするー。どうしよう、電話かけようかな。でも、やっぱり迷惑だし、達也君も忙しいだろうし、やらない方が良いよね、うん。きつとそうに決まってる。…いや、ダメよ真亜子。ここで怖気づいたらあんなの人生は一生台無しだわ。…えー、でもお…。

真亜子、悩んでいるのか変な唸り声。と、優希入ってくる。

真亜子 あー。うー。

優希 …何やってんの??

真亜子 ぎゃあああああああ!

優希 だあああああっ!?

間。

真亜子 びっくりさせないでよ!

優希 私の方がびっくりしたよ!

真亜子 あーもうホント心臓が止まるかと思ったあ。

優希 …何やってたの?…黒魔術?

真亜子 (聞いてない)ああもう、…でもこれで先延ばしにはなるけど。何だか嬉しいような、悲しいような…。うむむ。

優希 もしも??

真亜子 ああうん?(じろじろ見て)…何やってんのアンタ?

優希 それは私の台詞。真亜子こそ何やってるの？

真亜子 えゝゝ？それはな・い・しょ(はあと)

優希 …キモッ…

真亜子 ちよ、ちよっと。今の視聴者サービスだったのに！

優希 何訳の分からない事言ってるの。(真亜子の持つ携帯を見て)…あ、わかった。真亜子
つたら、達也君に…

優希、言いかけた所を真亜子に口を塞がれる。

真亜子 ちよっと！何言おうとしてんのよ！

優希 フモッフモツ！（口を塞がれ何も言えない）

真亜子、腕を放す。

優希 …死ぬかと思った…

真亜子 全く、何処で誰が聞いているかわからないんだから。自重してよ。

優希 自重って…。あのさ、好きな人の電話の前でモジモジするとか貴重なもの見せないで
よ。

真亜子 なんでモジモジしてたって知ってるの!?

優希 知ってちゃ悪いの。

真亜子 さては覗いたの！いやらしい子！

優希 見てないから。ていうか、皆知ってるし？真亜子が達也君を好きなの。

真亜子 え…それホント？

優希 私が嘘付いたことある？

真亜子 無いけど。

優希 でしょ？

真亜子 そうなのか…。え、てことは、私が達也君を好きな事、達也君は知ってるの!?

優希 さ、さあ…？達也君には聞いたことないけどさ。

真亜子 ああもう。そこが重要なのに。

優希 って私に言うなし。

真亜子 じれったいわね。やっぱり確認するべきか。(携帯を見る)

優希 良いよ？普通にここで電話して。

真亜子 えー、いいよお。恥ずかしいよお。

優希 大丈夫。私たち親友でしょ？

真亜子 優希…

優希 面白半分で見せてあげるから。

真亜子 優希！

真亜子、優希、追い掛け回してはしゃぐ。

一美、入ってくる。

二人の姿を見て入り口に立ち尽くす。

一美 (コホンと咳をして)あ、あのー。もしもし？

くるみ星人より愛を込めて。

優希 (気づく) はい！

真亜子 あれ、一美。

一美 ここ、今使ってますか？

優希 (真亜子を見て) …微妙に…。

真亜子 (優希を見て) 使用中？

優希、真亜子 (同時に) かなあ？

一美 あ、じゃあ良いです。やっぱり他の所へ行きますので。

優希 えっ…？

真亜子 ええ？別に使って良いよ？ね、ホラホラ。

真亜子、去りかけた一美の手を掴んで部屋の中に入れる。

一美 でも、人がいるとちよっと…。

真亜子 いいじゃん、別に私ら見ないし。

一美 はあ。

優希 良いよ、普通に使って。

一美 ……そうですか。

一美、武士の蹴った椅子を立て直し座り鞆から道具を取り出そうとする。
二人、メッチャ見てる。

一美 え、いや、何でもないですよ。

真亜子 じゃあ私たちに見られても問題ないよね？

一美 見ないって言ったじゃないですか。

優希 なんかに隠すようなことなの？

一美 そういうわけじゃないんですけど。

真亜子 じゃあ、何なのよ？

一美 それは…

真亜子 ここを使いたい理由は？その鞆の中身は？ほら、言ってみなさいよ。

一美 (空の方を見て) 空が綺麗ですねえ。

真亜子 思いつきはぐらかしてるし。

優希 あー、ホントだ、超綺麗ー。

真亜子 しかも一緒に見てるし！

優希 真亜子も見なよ、超綺麗だよ？

真亜子 えー？(空の方を見る) ……あ、ホントだ。凄い綺麗。

一美 ですよ。

真亜子 久しぶりに見たなあ、こんな空。

優希 うんうん、私もー。

武士、入ってくる。

優希 あれ、武士？

武士 あれ、お前らなんで居るの？

優希 武士こそ。実家帰るんじゃ無かったの？

武士 え、あー…俺は…忘れ物。

優希 へえ、珍しいね。

武士 ていうか、お前からこそ何してるの？

優希 呼び出されたの。文哉からメール来てなかった？

武士 え？来てないよ？

優希 あれー？

真亜子 武士、実家帰るって言ってたからなあ。文哉、メール送ってないのかもよ。

武士 そうか。

優希 文哉もそういえば来ないね。

武士 で、何か話してた？

真亜子 別に…何も？

優希 うん、ダラダラしてたかな。…あ、じゃなくて、真亜子が達也君に…

真亜子 ああっ！

真亜子、恐ろしい勢いで優希の口を塞ぐ。

真亜子 だーかーらー！

優希 フモッフモツ！（口を塞がれ何も言えない）

真亜子、手を離す。死にそうな優希。

武士 …あー、大体わかった。

真亜子 うっそ!？

優希 …ほらね、言った通りでしょ。

真亜子 うわー、武士にまでばれてんの？かなりシヨックなんだけど。

武士 いや、まあ知ってるけど。でも、片思いとか別にいいんじゃない？ていうか、そういう風にやっつてんの、結構楽しんでるでしょ。

真亜子 ま、まあね。(照)

優希 まあその点では真亜子って幸せな女だよね。良いなあ、私も恋とかしたいーい。

真亜子 そのうち優希にも好きな人できるって。

優希 そうかなあ？

真亜子 わかんないけど。

優希 だろうね。

一美 皆、楽しそうですね。

一同、一美の方に振り向く。

一美、戸惑う。

一美 いや、なんか楽しそうだな、と思ってついポロツと。

優希 あ、そう。

一美 …楽しくないんですか？

真亜子 いや、楽しくないわけじゃないけど、ねえ？

くるみ星人より愛を込めて。

優希 うん、なんていうか…そんな、言葉で言うほど楽しいってわけじゃない…かな。

真亜子 え、そうだったの？

優希 え…。

真亜子 私あんなに達也君のことでいじられて、それで全然楽しくなかったなんて。私、浮かばれない…。

優希 え、いや、だって。さっきのは恒例行事っていうか。

武士 何それ。

優希 それで楽しい楽しくないって言うのは、ちょっと違うよ。

真亜子 楽しくなきや、やった意味がないじゃない。

優希 お笑い芸人みたいな根性出さないでよ。

一美 やっぱり楽しそうですね。

真亜子 ほら、楽しいってよ。

優希 そういうならそれでいいんじゃない。

武士 グダグダだな。

間。

真亜子 …ていうか、そうだ！

真亜子、一美に歩み寄る。

真亜子 (近づきながら) さっきの用件聞いてなかった！アンタ、何しに来たの！？

優希 もういいじゃん、別に。

武士 (優希に) どうしたの？

優希 なんか、一美が入ってきた理由が謎なの。

武士 謎？

真亜子 さあ、白状しなさい！

一美 …わかりました。…じゃあ。

一美、鞆の中からいろいろと出して、何かを握る。よく見てみると、それはカッターである。

武士 おい、それって…

真亜子 アンタ…まさか！

一美、カッターの刃を勢い良く出す。一美、無言で真亜子に近寄る。

武士 おい！

優希 やめなよ！？

真亜子 い、いやああああ！

一美 ああああっ！

真亜子、尻餅をつく。

照明落ちる。何かが勢い良く切れる音。
再び照明がつくと、一美、カッターで鞆の中から出した色画用紙を思いつき切り切っている。

武士 …は？

真亜子 …ん？

真亜子、身構えを解く。

一美 切りたかったんです、これ。色画用紙。でも、広げられる場所がなくて。

真亜子 あ、…ああ、そうなの。そうなんだ、あはははは。(笑い続ける)

優希 びっくりした！

真亜子 あはははは…ってもう！アンタ、雰囲気出しすぎ！殺されるかと思ったじゃない！

一美 ちよっとやってみたかったんです。

真亜子 ちよっとって、アンタね…！

一美 (適当な方を見て) あ、あそこにいるのは達也君？

真亜子 ええっ?! た、達也君? どこどこどこ?

一美 あっちの方に。

真亜子 マジで?! ごめん、ちよっと行ってくる!

真亜子、ウキウキ気分退場。

武士 …わかりやすいな、あいつ。

優希 一美もいつの間にか上手いね、真亜子の操縦法。

一美 まあ、あれだけ見させてもらってたら。

文哉、新聞を持って入ってくる。

優希 あ、文哉。

文哉 宮本。小島、何しにいったの？

優希 ああ、達也君探しにちよっと。

文哉 あっそ。じゃいいや。

武士 いいの？

文哉 (新聞を置いて) ていうかさ、例のアレ、見た？

一美 ああ、見ました。

優希 え? 何それ?

武士 あー。わかった、くるみ星人だろ?

優希 くるみ星人!?

文哉 その通り! 「謎のくるみ星人、極秘情報入手! …これは私どもの信頼の置ける筋からの情報であるが、現在地球上に地球外生命体即ち異星人達が我々と同じように暮らしていることが明らかとなった。以後、彼らのことをくるみ星人とここでは呼称する」

優希 何それ? 本当?

文哉 俺も半信半疑だけど。

くるみ星人より愛を込めて。

優希

ねね、なんでもくるみ星人っていうの？

文哉

ちよっと待って、続き読むから。「彼ら、もしくは彼女等は地球人と外見的特長においてなんら変わるところがないが、一つだけ違いが存在する。それは即ち、くるみ星人は、脳の組織が我々地球人と違い非常に硬く、まるで殻をむいたくるみのようであることからこの名がついたものである。現在、我々はこの件に関し引き続き調査中であり……」って、こんな感じかな。

武士

……なんだろうね、このトンデモ記事。

優希

なんかねえ。くるみ星人か……。

一美

でも、どうして脳みそがくるみだってわかったんでしょか？

武士

そりゃあ……まあ……中身確かめるには……頭、割るとか。

文哉

脳髓グシャァ。

一美

そんな。

優希

えー、やだー。

文哉

グロいよね。俺は好きだけど。

優希

え。

文哉

ってわけで。

文哉、ホワイトボードにくるみ星人と大きく書く。

文哉

今度の学祭に向けた会報に、我がSF研究会ではこのくるみ星人を特集枠に持って来たいと思ってるんだけど異議ある人いるか？いないね、じゃあ決定。

優希

早ッ！

一美

盛大な企画ですねー。

武士

文哉なんか張り切ってない？

文哉

そりゃあ一応部長だし。くるみ星人なんてこんなSF研究会向きのニュースがあるのに、これに挑まないなんてその方が罪悪っしょ。

武士

それもそうか。まあ、俺は良いと思うよ、お前がやりたいって言うなら。

優希

んー……真亜子も多分こういうの好きだろうしね。皆やるのに私だけやらないわけにもいかないし。

文哉

うん。じゃあ頑張ろうな。さて、じゃあ早速原稿に取り掛かるかー。おっ、この色画用紙、表紙に使えるじゃん。

一美

あ、それ、私の……。

文哉

表紙考えるのが、構成考えるのが先にするか……。あ、でも内容も決めないと。じゃあまずは資料集め、手始めに図書館にでも行って新聞から読むか。

文哉、色画用紙を持ったまま出て行く。

一美

あの、それ、私のなんですけど。

一美、追いかけるようにして出て行く。
間。

武士

勢いあるなあ。

優希 そうか？

武士 前に比べればさ。

優希 まあ、去年に比べたらね。

武士 去年の会報、散々だったしな。

優希 いや、あれは真亜子が悪いんだよ。

武士 あいつ、自分でやりたいっていったくせに途中で放り投げるし。

優希 あの時は大変だったね。

武士 去年の特集って…。

優希 「ピラミッドと聖徳太子」。

武士 ああ。確か、聖徳太子がシルクロードを通して、エジプトまで行って超能力を授かったっていうやつか。

優希 日本に帰る時はレポートで一瞬だったんでしょ。

武士 そうそう、そんなだった。

優希 聖徳太子がね。

武士 ま、10人の話を聞き分けられる時点で既に超能力だよなあ。

優希 面白いよね。どこから探してくるんだろう、こういうのって。

武士 言うやつがいるんだよ。いろいろと。

優希 そうなんだ。

武士 ピラミッドだって超古代文明の大いなる遺産だなんて言う人もいるし。

優希 空想力あるよね。

武士 ま、頑張って下さいとは思っけれど。…今年はどうなることかと思っただけど、くる

み星人、ねえ…。

優希 うーん。どうなんだろうね？

武士 眉唾だよなー。出所がこんな雑誌じゃあな。いっそ正体は北の作業員とかの方がリア

リティあるよなあ。

優希 それはそれで現実味がありすぎるよ。

武士 そうか？

優希 確かに作業員の方がいる気もするけどさ。ていうか、現実にいるのかもだけどさ。なんかそういうの、洒落にならないもん。

武士 まあ、そうだなあ。

優希 フィクションを扱ってこそそのSF研だよ。

武士 それは言ってるな。皆もわかってやってるんだろうし。

優希 にしても真亜子、遅いなあ…。

武士 もしかして、本当に達也を見つけたとか？

優希 そんな偶然あるかなあ。

武士 あるかもよ。今頃告白してるとか。

優希 それは無いと思うよ。あの子はああ見えて臆病だから。せいぜい達也君の後をひたすら付け回すくらいかな。

武士 それ、問題あると思うけど。…恋する乙女って凄いやな。

優希 違うよ、あれは発情した雌猿。

武士 あはは、そりゃ言い得て妙だな。

優希 でしょ？

武士 でもそれアイツに向かって言える？

優希 言えるわけじゃないじゃない。でもね、真亜子見てて思うのよ、「嗚呼、私たちも所詮猿なんだな」ってさ。

武士 ん、じゃあ猿の惑星だ。

優希 そ、猿の惑星だもんね。皆が皆あじゃじゃないけど。私も、多分違うし。

武士 優希は今恋愛とかしてないの？

優希 してないよ。

武士 好きな人とかは？

優希 うーん、微妙。

武士 乾いてるなあ。

優希 ……実はね、達也君。

武士 え？マジで！？何それ？三角関係？

優希 嘘だよ。

武士 嘘だよ。

優希 ……そうだな、武士でも良いよ。

武士 は？

真亜子、走って入ってくる。

優希 真亜子！？

真亜子 黙って！

真亜子、隠れる。

庄太郎、入ってくる。

武士 黙ってって、お前の方が断然騒いでるぞ。

真亜子 しーっ！いい？誰か知らない人が部屋に入ってきてても「小島真亜子はこの部屋にいませんん」って言うってね！絶対ね！

優希 ええ？

庄太郎 真亜子！

三人 あ。

武士 えーと、小島真亜子はこの部屋にいません。

優希 言ってみるな！

真亜子 あー。隠れても無駄だったか。

武士 いや、お前が大声出しててるから。

庄太郎 真亜子！探したぞ！

真亜子 (現れる) 庄太郎！

庄太郎 お前、こんな所にいたのか！

真亜子 くっそう。でも、ここで会ったが百年目、成敗してくれるわ！

庄太郎 望む所だ！…って、違うだろ真亜子！

優希 いきなり何なの？

文哉、一美入ってくる。一美は色画用紙を大切そうに抱えている。
文哉、庄太郎とすれ違いざまに庄太郎に一発かます。

一美 私の色画用紙…。

文哉 なんだなんだ、穏やかじゃないなあ。

庄太郎 いてえ！何をするんだ！

文哉 あんた、騒ぎすぎだぞ。ここはSF研だ、ここに入ったからにはこのルールに従ってもらおう。まず一つ、SF研究会会則第1章3編22条！初対面の時は名前年齢および身分を宣言せよ！

庄太郎 今はそれどころじゃないんだ！

文哉 おりゃ。

庄太郎 いたた！…ちっ、名乗れば良いんだな。

文哉 物分かりの良い人って好きだよ。

庄太郎 …泊庄太郎24才、小島真亜子の…許婚です！

優希 えー？

武士 許婚？！

庄太郎 さあ真亜子、来るんだ！

真亜子 嫌よ！何よ、私の気も知らないで！

庄太郎 俺にはお前しかいないんだ！

真亜子 もう終わった事でしょ！私は私で理想の相手を探すの！

庄太郎 僕が理想じゃないと言うのか！？

真亜子 当たり前でしょ！誰が庄太郎なんかと。

文哉 だからお前ら。うるさくしないでって言うてるんだけどさあ。

文哉、仲裁に入るが真亜子と庄太郎にもみくちやにされる。

庄太郎 あんなに俺たち愛しあったじゃないか！

真亜子 はあ何それ！？皆に誤解されるようなこと言わないで！

文哉 真亜子も、挑発乗ってないで。おい…。

庄太郎 誤解も何も、あの時言った言葉は偽りだったのか！？(写真出す)

真亜子 いつの時の写真よ！私が小学生の時のでしょ！？

庄太郎 何故そんな風に僕を避けるんだ真亜子！

真亜子 私は今達也君しか見てないの！放っておいて！

文哉 うるせーっ！

間。

文哉 …俺が一番うるさいね(照)。

皆、きれいにずっこける。

文哉 …とにかく。二人の事情はわからないけど、争っても解決しないと思うから、ここ

はひとつ、冷静に話し合ってもらいたい。

真亜子 こんな人と話す事なんて無いわよ。

庄太郎 そんな！

文哉 血で血を洗う修羅場ってわけか。
優希 そこまで言っていないよ？
文哉 ……わかった。

文哉、庄太郎と対峙する。真亜子、優希のもとへ逃げる。

文哉 SF研究会会則第5章4編68条、SF研のメンバーが痴漢強盗FBI宇宙人その他危険とみなされる人物に出くわした、もしくはそのような事態に陥った場合、他のメンバーは全力でその危険を回避しメンバーの安全を確保する。

一美 会則にそんなのありましたか？

文哉 たった今作ってみました。

武士 作ってみるな！

庄太郎 この僕が危険人物だと？そんな馬鹿な！

優希 で、でも真亜子嫌がっているじゃない。嫌がっている人を無理矢理連れて行くことするなんて！

文哉 宮本の言う通りだね。それって常識から考えてもやばくないですか？

一美 そうですね。

真亜子 そうよそうよ！さっさと帰って！

庄太郎 しかし…僕は、諦めて帰るわけにもいかないんですよ。

文哉 そう。…じゃあ、小島を連れて行きたいのならば、俺達を倒してからにするんだな！

(決めポーズ?)

真亜子 何でそういう展開になるの!??

武士 文哉、格ゲー好きだもんな。

優希 そういう問題？

武士 ゲーセンにいるオタクを相手に連戦連勝してる。

真亜子 ああそうですかそりやおみそれいたしやしたって、強っ！

庄太郎 良いでしょう。サシで勝負ですか？

文哉 そうだな、流石にこの人数相手じゃ不公平だろ。

真亜子 でもちよっと待って！庄太郎、ああ見えて結構喧嘩強いよ。男って言っても、武士や文哉じゃあてにならないし。

武士 悪かったな。

文哉 わかってる。

武士 え。

文哉 でも大丈夫。秘策がある。

真亜子 秘策？

庄太郎 どなたがお相手を？

文哉 この挑戦…冬木が受ける！

文哉、一美を指名。

真亜子 えー!??

一美 なんで私？

武士 一美にやらせるの？

優希 そんな、文哉！
文哉 さあ、行けっ！ファイツ！

ゴング。庄太郎、殴りにかかる。

庄太郎 うおりゃー！
一美 わ。
優希 きゃー！
真亜子 きゃあー！

庄太郎、一美を殴ったり蹴ったりで追い詰めていく。避ける一美。真亜子、優希は逃げ惑う。一美、隙を伺って退場。庄太郎もその後を追いついて、退場。間。殴る音が聞こえる。

優希 痛そう。
真亜子 何で一美に任せるのよ！あの子、やられちゃうわ！
文哉 大丈夫よ。
真亜子 どこからそんな自信が！
優希 ねえ、武士。
武士 ああ。俺、行ってくる！
文哉 ダメだ市原！これは一対一、男と女の真剣勝負なんだぞ！

武士、行こうとするが、さらに殴る音が激しさを増す。一方的な展開になったようだ。気圧されて武士、動けない。

優希 武士ー！
武士 いや、だって、これ結構やばくね？
優希 んな事言ってる場合か！
真亜子 なんか、激しくなってきたけど。
文哉 いや、この音は…押されている！
真亜子 はあー！？
優希 え、一美！

最後の一撃。必殺技が決まり、K.O。
間。

一美、入ってくる。

武士 …無傷？
一美 またつまらぬものを倒してしまいました。
優希 一美…。
一美 私に触ると…怪我しますよ。
真亜子 …かっこいい。

庄太郎、ボロボロになって登場。

庄太郎 くそう。こんなの、聞いてないぞ…。

文哉 挑戦を受けておいて何を今更。

庄太郎 そいつ、人間じゃない。

庄太郎、地に伏す。一美の勝利。

真亜子 ま、まあ、なんにせよ！庄太郎は負けたわけだし、これでめでたしめでたしね！

文哉 SF研の勝利だな。

真亜子 やったー。

優希 そうかな？

武士 これで良かったのか？

庄太郎 いや、まだだ！

庄太郎、立ち上がる。びびるメンバー。

一美 私相手に立ち上がるとは…只者ではないようですね。

庄太郎 当たり前だ！このまま引き下がるか！お願いだ、話だけでも聞いてくれ真亜子！

真亜子 イヤだってば！

文哉 相当小島に対する念が強いのか…わかった、聞いてやろう。

庄太郎 本当ですか！有難う御座います。

真亜子 何言ってるんの文哉！こんな奴早く追い出して！

文哉 小島こそ何言ってるんだよ。一度闘った相手は戦友とかいてトモと読むものだぞ。

真亜子 わけわからない！

武士 いや単純に格ゲーのやりすぎだと思う。

真亜子 あんたが格ゲー好きなのはわかったから。

文哉 わかってない！お前は何もわかってない！

真亜子 は？

文哉 俺がどんな思いで百円玉握りしめて毎日ゲーセンに通いつめているか！プリクラ撮りに来た女子高生にドン引きされながら勝利を続ける俺の執念を…！

真亜子 知るか！じゃあ、優希！

文哉 キッ。

優希 あ、突然持病が。

真亜子 初耳だよ！じゃあ、一美、アンタのその力でもう一度あいつを…。

文哉 シャー。

一美 あー、空が綺麗ですねえ。

真亜子 思いつきはぐらかしてるし。

文哉 今日の洗濯指数は100じゃないか。

真亜子 しかも一緒に見てるし！

文哉 小島も見て御覧、美しい空だぞ。

真亜子 あ、ホントだ。超綺麗…てもう、文恵！変な事しないでっば！

文哉 部長の権限です。

真亜子 濫用するな！

武士 さっきから味方同士で言い合いするなよ。(庄太郎を見て)…あいつはあいつで話すタ
イミング伺ってるし。

庄太郎 僕達の出会いは十年前にさかのぼる…。

武士 あ、もう無理矢理話すの？

真亜子 あゝもう。

庄太郎 あの頃は真亜子も小学生。庄たん庄たんて、僕に懐いて可愛かったのに。

真亜子 分別が無かっただけよ。

庄太郎 「あたし、庄たんのお嫁さんになるうー★」って言ったじゃないか！

真亜子 だから、いつの話よ。

優希 え、じゃあ許婚って。

武士 本当じゃ無い？

真亜子 …確かに庄太郎とは幼馴染だけど、許婚なんて馬鹿みたい。庄太郎のでっち上げよ。
庄太郎 でっち上げだなんてそんな！

真亜子 いい加減目を覚まして！何で許婚よ！何で…。あんなんかと結婚出来るわけがないで
しょ！大学卒業したのに定職にも就かないでバイトで何とか食いつないで。昼まで寝
て朝までゲームしてる庄太郎なんか典型的なダメ人間じゃない。

庄太郎 ぐっ、それは…！

武士 そりゃあ酷いわ。

優希 真亜子でなくても拒否るわ、それ。

一美 いわゆるインテリ崩れですか。

文哉 そう呼ぶにはオッサン度が足りないな。

庄太郎 なんだと。

武士 え。

庄太郎 貴様らに言われる筋合いなど無い！

文哉 おっと、こっちに当たるのはちよっと筋が違っくんじゃない？

庄太郎 く。

優希 見た目、良いとこのお坊ちゃんにも見えるけど。

真亜子 違う。見栄っ張りで、そんな格好じゃないと表に出て歩けないの。

庄太郎 真亜子…！

真亜子 だから、無理なの。私は達也君が良いの。達也君は庄太郎と違って爽やかで、カッコ
よくて、とにかくイケメンなの！

優希 イケメンって。

真亜子 しかも達也君はあんたみたいなニート予備軍みたいなじゃなくて、ちゃんと就職活
動して正社員で入ってバリバリ稼いで来れる人間になるの！

武士 達也の人生勝手に決めるなよ？

文哉 フリーターと正社員では40年の勤務でもらえる給料の差額が約1億にものぼると
のデータがここに。

一美 すごいですよね。

武士 どこからそんなものが。

一美 この前の就活ガイダンス行かなかったんですか？

優希 真亜子、だから今まで達也君達也君って…。

真亜子 …。

庄太郎 そんなに達也とかいう男が好きなのか。
真亜子 …。

庄太郎 何とか言ったらどうなんだ。

間。

真亜子 …忘れてる。

庄太郎 え。

真亜子 忘れてるんだよ。

庄太郎 真亜子。

真亜子 いつか話してくれたじゃない。…もう、覚えてないか。

庄太郎 …覚えてるよ。

真亜子 …。

庄太郎 僕は、望んでこんな生活をしてるわけじゃないんだ。

真亜子 知ってる。小説家、なりたいんだよね。

庄太郎 あ、ああ、そうだよ。

真亜子 知ってる。

庄太郎 今はまだ全然だけど、きっといつかはさ。

真亜子 頑張ってる。

庄太郎 え。

真亜子 頑張ってる、言うなって。庄太郎、そう言ったよね？もっとながらばって面白いの書けば良いじゃない、二人で力合わせて頑張ろうよって。あの時、庄太郎ずっと落ち込んでて。

庄太郎 それは、だって僕は…。

真亜子 僕はわかっている。自分に文才が無いし、面白い展開も人物描写も出来ない。自分が出れない人間なのは自分が一番わかっている。だから口出すな。頑張れとか気軽に言っな。お前に何がわかる。…こう言った。

庄太郎 …。

真亜子 頑張るしか他に方法無いのに、頑張れって言うなって。

庄太郎 …そうか。

真亜子 じゃあどうしたらいいの？どうすれば良かったの？…わかんない。わかんなかったよ。私は、都合の良い女なんかじゃないもん。大人の対応なんて、出来ないもん。ただ頑張れって、それだけは言えたけど。

庄太郎 …そうか。

真亜子 だから、いいの。もういいの。

間。文哉、何かの気配に気づいてこっそり隠れる。

真亜子 もう、いいでしょ？私は達也君が良いの。

庄太郎 真亜子…。

真亜子 帰って。

庄太郎 …でも。

真亜子 お願い。

くるみ星人より愛を込めて。

庄太郎、はけかけて、振り向く。

庄太郎 ……今、言っても、もう遅いかな。…ごめん。

真亜子 ……遅いよ。

庄太郎 今日は、本当は、お前にこれ渡したかったんだ。

庄太郎、スキの束を渡す。

真亜子 これ…。

庄太郎 本当は、あの場所でちゃんと、渡したかったんだけどな。

真亜子 あ。

間。

真亜子 ……覚えててくれてたんだ。

庄太郎 ああ。…でも遅いよな。そこまで嫌われてるなら、僕はもう出る幕じゃないんだろう。

…じゃあな、真亜子。

真亜子 ……馬鹿。

庄太郎 ん。

真亜子 どうせ持って来るなら。もっと綺麗な花、持ってきなさいよ。

庄太郎 二人の約束だったろ？

真亜子 本当に…どうすればいいのかわかんない奴…。

真亜子、庄太郎に寄り添う。

優希 あれー？

武士 なんかに…すごいな。

優希 なんかに結局良い感じでおさまっちゃった。

一美 こんな場面、見ているこっちが照れますね。

武士 そうだな。スキで仲直りするカップルなんて、なかなか見られるもんじゃないぞ。

優希 確かに。

武士 ……あれ？

一美 どうしたんですか？

武士 なんかに、聞こえないか？

優希 え…。

遠くから、サイレンらしき音。

優希 嘘ッ?!

武士 警察呼ばれた？

一美 さっきの戦いで？

武士、優希、一美、窓の方へ駆け寄る。
サイレンはどんどん近付いてくる。

武士 あんなに大げさにボコボコやってたらなあ。

優希 一美が本気出すから！

一美 半分も出してませんよ。

武士 え…。

優希 うわーこっちくるよ。

サイレン、止まる。

武士 …あ、止まった。

優希 ちよつと文哉、あんたが責任者なんだからここはひとつ文哉が…って居ないー！？

武士 逃げられた！？

庄太郎 僕も気がつかなかった。

優希 えーどこ行ったの？

真亜子 隠れてないで出てきてよー！

一美 この気配の消し方…。彼もやはり只者ではありませんね。

優希 いや感心してないで。

武士 普通にまずいだろ、この状況。

真亜子 はーい提案。

一美 何ですか？

真亜子 とりあえず、ここは騒ぎを起こした張本人達に謝りに。

庄太郎 ちよつと待て、なんで僕が行かなければならないんだ！大体真亜子、元はといえばお

前が…。

真亜子 庄太郎…ダメ？(潤んだ瞳で)

庄太郎 任せといて！さあ行くよトモコさん！

一美 あの、私、一美って言います。

庄太郎 そうか、一美ね、カズミ。ばっちり覚えたよ。自己紹介が遅くなったんですけど、僕

は泊庄太郎24才、小島真亜子の…

一美 あ、それさっき聞きました。

庄太郎、一美、退場。

真亜子 まずは、これで良し。

優希 …もう、今日はあんたに振り回されてばかり。

真亜子 ごめん。

優希 なーにが達也君だよ。今までののは何だったの？

真亜子 達也君も好きなのは本当だよ。

優希 庄太郎さん、だっけ？あの人のこと、私これっぽっちも聞いてないよ。

真亜子 だって話してないもん。

優希 ひどーい。

真亜子 だから、ごめんってば。でも今度は優希が私の事振り回して良いから。何でもします。

優希 本当？

真亜子 女に二言はねえ！

優希 じゃあ、縄で縛られて、目隠しされて「御主人さま」って悶えろって言われたらそれやるの？

真亜子 …やるわよ。

武士 やるなよ。

優希 …じゃあ、そうだなあ。

真亜子 …。

優希 ラーメン食べるのと映画見に行くの、どっちが良い？

真亜子 え。

優希 勿論、おごりだからね。

真亜子 優希。

優希 どっちが良いの？

真亜子 …ラーメン、食べたい。

優希 じゃあそれでいいよ。あ、でも店は私決めるからね。どこが良いかなあ。

真亜子 …優希。

優希 絶対だからね。

電話、鳴る。

武士 あ、電話。

優希 この着メロ、真亜子のじゃない？

真亜子 そうだ。…げ！達也君！？

優希 え、今更？

真亜子 (慌てて) どうしよう、どうしよう優希。

優希 と、とりあえず出て。

真亜子 う、うん。(電話に出る。声色変えて) あ、もしもし？久しぶり達也君。え？…うん。

うん、いや、大丈夫だよ。ごめんね。

優希 声色変えすぎだから。

真亜子 えっとね…え？何でって、その…。あー、その…。あ、うんうん、武士が達也君に用があるんだって！代わるね！

武士 え、俺？

真亜子、武士に無理矢理携帯を渡す。

武士 よう。達也、久しぶり。

優希 何で渡すのよ！

真亜子 だって…。

武士 …いや、用事って程の事じゃないんだけどさ、ま、お前には言っておこうと思ってたし。

優希 ほら。

真亜子 でもさあ…。

優希 間が悪いなあ。

武士 俺、学校やめるから。

二人 …え?!

武士 うん。まあ。また会おう、そんな話すよ…じゃあな。

武士、携帯を切る。

武士 俺、決めた。学校やめるから。

音楽と共に溶暗。

#2 時間割とゴミ袋とクルミと涙と笑顔

舞台明るくなる。いつもと変わらない部屋の様子。ホワイトボードには打倒くるみ星人の文字と会報出版までの予定が書き込まれて、印刷された紙なんか磁石で貼ってある。

庄太郎がいる。前と同じ服装である。庄太郎は菓子を食べながら漫画を読んでいる。時々、笑い。

優希入ってくる。庄太郎を一瞥した後荷物を置き、片づけをはじめ。

庄太郎 く、くくくっ…何だこれ…あははは。

優希 …ふう。

庄太郎 ぶっ、ヒヤヒヤヒヤ。(読み終えて)あー、この漫画面白いなあ、何で今まで知らなかったんだろう。

優希 …あの、泊さん。

庄太郎 庄太郎でいいよ。

優希 庄太郎さん。何普通に居座ってるんですか。

庄太郎 大丈夫だよ、今日のバイトは夕方からだから。

優希 そういう事を言ってるんじゃないんです。

庄太郎 ああ、同じ服をずっと着てるのは不潔だったって?

優希 それは、少し思っていましたけど。

庄太郎 大丈夫、毎日風呂入ってるよ。

優希 あの、だから。

庄太郎 それでも汚いとか言うなら、漫画ならちゃんと指紋も残さず棚に返すよ?ホラ、ゴム手袋。

優希 付けなくて良いです。そうじゃなくて。庄太郎さんこの学生じゃないでしょう。あんまり部外者がここにいられたりすると、困るんです。

庄太郎 見つからなきゃア問題ないよ。

優希 …鍵、どうやって開けたんですか。

庄太郎 真亜子にちょっとね。

優希 真亜子ってば…、全く。

庄太郎 部長の許可が必要だったかい?

優希 …いいえ。どうせ文哉も、貴方に鍵、渡すと思いますから。

庄太郎 別に悪いことはしてないよ。たまに来て、こうやって漫画読んでるだけ。

優希 …本当に暇人なんですね。

庄太郎 それは違うよ。君とは時間の使い方が違うだけさ。

優希 え？

庄太郎 今君は、僕の事をアイツ年上のくせに出来損ないとか思っただろう。

優希 いや…。

庄太郎 自称小説家志望の割に真面目に原稿書いてるわけでもなくヘラヘラ漫画読んで馬鹿笑いしてる実質やる気ないフリーターだと思っただろう。

優希 そこまでは。

庄太郎 ま、そう思うのも仕方はないけど。でもね、君と僕の時間割は違うんだよ。僕の時間割は、この時間はこの教室でこの先生って決まってるわけじゃあないんだ。やる時は思いつきりやる、やらない時は何が何でもやらない。スイッチの切り替えはちゃんとしなきゃね。僕はこう見えても、原稿書くのは早いんだぜ。

優希 …そうですか。

庄太郎 素っ気ない返事だなあ。

優希 …私は、どちらかと言えば講義は時間通りきっちりと隙間無く決まってたほうが良いです。

庄太郎 貧乏性か。

優希 庄太郎さんが自由すぎるんですよ。

庄太郎 ま、人間24年も生きていれば人生の過ごし方のバリエーションなんて人によって千差万別だよな。

優希 私まだ19です。

庄太郎 それでも同じさ。女だって19にもなれば、他人に言えないような思い出のひとつやふたつ。

優希 なんですか、それ。

庄太郎 例えば、甘酸っぱい初恋とかね。

優希 セクハラ？

庄太郎 おおっと、失言。

優希 …ファーストキスはレモン味ってやつですか。

庄太郎 そそ、そんな感じの、思い出。

優希 …あるように見えます？

庄太郎 無いの？

優希 残念ながら。

庄太郎 勿体無いねえ、そこそこ可愛いのに。

優希 今の、真亜子に言いますね。

庄太郎 ああっ、冗談だよ、冗談。

優希 面白半分でいったなら、それはそれで傷つきますよ？

庄太郎 意地悪しないでよ。ごめんごめん。

優希 じゃあ口止め料に片付け手伝ってもらえますか？

庄太郎 ああ、それ位で済むならならお安いご用さ。どうしたらいいんだい？

優希 そのの食い散らかしたの、何とかしてください。

庄太郎 …。

庄太郎、自分が食べたお菓子の袋なんかをゴミ箱に入れる。

優希、ゴミ袋を縛る。

優希 ついでにこれ、下の集積場まで運んでもらえます？

庄太郎 え？僕が？

優希 お願いできますね？

庄太郎 …やるよ。

優希 ありがとうございます。(手渡す)

庄太郎 (受け取る)君、いい奥さんになれるよ。

優希 セクハラ。

庄太郎 こりやまた失礼。

文哉、入ってくる。本や雑誌をたくさん抱えている。

文哉 誰かいた？

庄太郎 こんにちは部長。

文哉 ああ、お久しぶり。調子どう？

庄太郎 元気100パーセントですよ。部長もお元気そうです。

文哉、庄太郎固く握手。

庄太郎、ゴミ袋を担いで退場。

優希 …友情？

文哉 かもね。掃除当番ご苦労様。

文哉、持ってきた本を机に置く。

文哉 ふう。

優希 こんなにどうするの？

文哉 まあ、これの資料用にと違ってね。

優希 頑張るね。

文哉 自分で言い出したことだし。今回の責任は俺にあるんだから。

優希 この前の課題は？

文哉 先週終わらせて提出済み。

優希 早いなあ。

文哉 さっさとやっておけばメ切りなんかには怯えないで済むの。

優希 そうもいかないよ。

文哉 そう？要領の問題だと思うけど。

優希 …時間割、か。

文哉 何の話？

優希 なんでもない。

文哉 そうそう。

文哉、優希にプリントを渡す。

くるみ星人より愛を込めて。

優希 あ、教室とれたんだ？ん、2階？

文哉 良い所とれたんだよねー。エアコンついてる部屋だし、そこそこ広いし。仕切りとかも用意してくれるように頼んでおいたから。

優希 …この待遇、まさか泣き落としじゃないよね？

文哉 涙っていうのは女だけの武器じゃないからね。

優希 また？もっと他に使うべきところはある気がするなあ。文哉、そんな簡単に泣けるならもっとそういうの活かした方が良いよ。劇団に入るとか。

文哉 考えとく。あとね。

優希 何？

文哉 これ。

文哉、優希に原稿を渡す。

優希 え、原稿？

文哉 そう、メンバー紹介のやつ。一人一ページだから、よろしくね。

優希 忘れてたよ。こんなのあったんだよねー。

文哉 出来れば来週までにね。

優希 わかった。

文哉、ホワイトボードに原稿についてと会場について書き加える。優希、原稿をしま

う。

真亜子、入ってくる。

真亜子 庄太郎、来てた？

文哉 お、小島。

優希 来てるよ、ほら。

真亜子 …アイツの鞆。やっぱりここだったんだ。

優希 そうだ真亜子、あの人に鍵の場所教えたでしょ。

真亜子 ごめん。

優希 勝手なことして。

真亜子 ついアイツの口車に乗せられて。

優希 どんな口車よ。

真亜子 教えてくれたら桃缶全部一人占めしていいって言うから。

優希 桃缶で釣られるな。

真亜子 大丈夫、最近はカロリー控えめな桃缶も多いんだよ。

優希 食べすぎを心配してるんじゃないの。

真亜子 良くないくない？

優希 良くないくないです。ていうか、簡単に教えちゃダメだよ。こういうご時世なんだから。

真亜子 庄太郎なら大丈夫だよ。

文哉 問題ないだろ。盗まれて困るようなものなんてないし。

優希 そうだけどさ。…皆甘すぎ。

文哉 そうそう、小島も。これ。

真亜子 なあに？

文哉 会報のメンバー紹介の原稿。一人一ページね。

真亜子 こんなもの、作文3行も書けない私がやるとでも思ってるの？

文哉 そう思ってた小島の分は書いといた。

優希 えー？

真亜子 さすが文哉！わかってる。

文哉 その文章で良いならね。

真亜子 なになに。「わたし小島真亜子！でも皆はキャサリンって呼んでね、キャハ☆ちな

みに私は超イケてるおとめ座のB型♪好きなものはいちごとクマさんのぬいぐるみ
なの☆:」ってなにこれ…。

文哉 俺にある女子力全部使って書いてみた。

真亜子 私、おとめ座じゃなくていて座なんだけど。

文哉 似たようなもんじゃないの？

真亜子 全然違うよ。

文哉 ま、それが嫌なら自分で書いてね。

真亜子 …もっとまともなの書く。

文哉 よろしく頼むよ。締め切りは来週までだから。

優希 凄い、服従させた。

一美、入ってくる。

一美 こんにちは。

文哉 冬樹、良い所に来たな。これなんだけどさ。

一美 なんですか？

文哉 これ、今度の会報の…。

文哉、一美に原稿を渡し説明。

真亜子 これ何の本？

優希 例のくるみ星人のだって。

真亜子 こんなに書かれてるなんてねえ。

優希 今やちよつとしたブームだもんね。ブログなんかでも結構話題に上がったよ。

真亜子 へえ…。

優希 とは言え、本当にいるのかなあ？

真亜子 でも面白そう。

真亜子、適当な本から読み始める。優希、空になったゴミ箱にゴミ袋を詰める。

文哉 じゃあ任せたぞ。

一美 わかりました。

優希 あ、一美のそのスカート、可愛くない？

一美 今日初めて着てみたんですけど。

優希 似合ってるよ。可愛いー。

一美 ありがとうございます。

真亜子 ねえ、今日の私は？私は？

優希 いつもと同じでいろいろおかしいよ。

真亜子 まちで？嬉しい？

一美 目が笑ってないですよ。

文哉 女の友情なんて所詮そんなものだろ。

一美 あ、来てすぐにあれなんですけど、ちょっと出かけてきます。

文哉 用事？

一美 ちよっと呼ばれてて。荷物置いておきます。

一美、出て行く。

真亜子、気を取り直して読書。優希は庄太郎の読んでいた漫画を片付け始める。

文哉 (カレンダーを見ながら) あっという間にあと1ヶ月か。早いもんだ。

真亜子 ねえねえ、なんで植物図鑑なんか持ってきたの？

文哉 敵を知るにはまず味方からってね。

真亜子 なるほど。

優希 意味、違う気がする。

真亜子 「クルミはクルミ科クルミ属の落葉高木の総称であり、食用として使用されるものに

オニグルミ、ヒメグルミ、シナノグルミ、テウチグルミなどがある。樹高は8から2

0メートルにおよぶ。」…ふうん、改めて見ると意外と知らないね、くるみの種類。

優希 20メートルも育つんだ。大きいね。

文哉 クルミの木材はお箸やマッチの材料になる。

真亜子 すっごーい。くるみの花ことばは「知恵」だって。

優希 そうなんだ。

真亜子 でもくるみだとさあ、花ことばなのかな？実ことばじゃないの？

文哉 実がなるってことは、花も咲くでしょう。

真亜子 だってくるみの花なんて普通見かけないじゃん。

優希 確かにね。花屋でも見かけないし。

文哉 でも花言葉の由来はこの前調べた。

真亜子 どういうの？

文哉 くるみって、実の部分が人間の脳みその形みたいに見えるじゃん？だから、ヨーロッパ

パなんかではくるみを食べると頭が良くなるって迷信があったらしいよ。それでくる

みの花ことばって「知恵」とか「知性」って意味があるんだってさ。

真亜子 詳しいー。

文哉 付け焼刃だけだな。

優希 でも、くるみとくるみ星人って関係ないでしょ？名前が似てるだけだよ。

文哉 そうでもないんじゃないかって、まあ、ここから先は俺の想像なんだけど…。

真亜子 聞かせて。

文哉 本当に頭が良くなるのかもしれない。

優希 どういうこと？

文哉 くるみ星人って、脳みそがくるみみたいっていうのは前話したよな？

真亜子 聞いたかも。

優希 この記事だね。

文哉 そう。で、くるみ星人は卵で増えるらしいんだけど、それがその卵もくるみの実にそっくりらしいんだ。

優希 本当なの？

文哉 手に入れたって記事がここに。

真亜子 (見る)：くるみにしか見えない。

文哉 もしかしたら昔、そのくるみ星人の卵を誰かがくるみと間違えて食べたのかもしれない。そしたら、くるみ星人がその人間の脳みそに寄生してしまったとしたら。

真亜子 怖い。

文哉 他の星からわざわざ来れるくらいの科学技術の進んだ奴らなんだから、頭が良いには違いない。端から見ればくるみを食べて頭が良くなったようにしかみえないだろうか、くるみ星人が人間に寄生したことにみんな気づかないで迷信だけが広まった。：どう？この仮説。

優希 面白いと思うけど。

真亜子 怖いようっ！：で、でも実際、自分はくるみ星人だって名乗りを上げた人、結局全員嘘だったんでしょ？

優希 え、頭割ったの！？

文哉 残念ながらDNA鑑定とレントゲンでね。俺もそれは読んだ。

優希 だったら、そんなくるみ星人とか。

文哉 だから言っただろ？寄生説は俺の推察だって。それに、本物のくるみ星人がわざわざ名乗りを上げると思うか？今まで隠れて暮らしてきたのに、今更？そんなわけないでしょう。きつと今も上手く隠れているに違いないしね。

優希 ま、そう言えばそうなるわね。

真亜子 うわーん、怖いよ。

文哉 くるみ星人、少なくとも先進国には、人口の0.001パーセントぐらいは潜んでるだろうって記事があったな。

真亜子 なんだ、たったの0.001パーセントお？少ないじゃない。

文哉 日本での0.001パーセントって大体2万人弱ね。

真亜子 多いじゃない！

文哉 小島、さつきから驚きすぎ。

真亜子 だってだって、2万人なんて懸賞でハガキ何枚か出してやっと当たる人数じゃない！そこ驚くところ？

真亜子 信じられない！もう地球はそんなにくるみ星人に侵されてるの？

文哉 らしいよ。

真亜子 じゃあ今こそ皆で手をとってくるみ星人を追い払わなきゃ！国同士で戦争したりしている場合じゃないよ！世界がひとつになればきつとくるみ星人なんてグチャっとなってベチヨっつとできる！

文哉 随分と左翼的な発言だな、小島。俺は好きだけど。

真亜子 違うよ、これはラブ&ピース。

優希 どっちでもいいよ。そもそもくるみ星人発見されてないのに、そこまで統計取れているなんてその記事の方がすごいから。

文哉 まあそれ、信憑性は薄いだらう。

真亜子 あ、そっか。

文哉　そもそもくるみ星人たちが地球で人間として暮らしている理由もさっぱりだし。有力な説ていうか、巷で騒がれているのには侵略とか調査とか、いろいろあるみたいけど。

真亜子　やっぱり侵略かなあ。

文哉　そうとは決まってるないだろ。

優希　侵略なんて、宇宙人モノの映画なんかじゃよくある話じゃない。

文哉　そうだけど、やっぱり資料が足りないからな。

優希　こんなにあるのに？

文哉　侵略説を裏付ける証拠に乏しいって言う意味で。

真亜子　そうなんだ。

一美、入場。

優希　ま、そこまで調べてあるならあとは書くだけだね。

文哉　任せろ。SF研歴代一の会報にする自信はあるから。

真亜子　でも、やっぱり怖いなあ。

優希　まだ言ってる。

真亜子　だって。

文哉　意外と、俺たちの中にもくるみ星人がいたりしてな。

真亜子　あーん。夜寝れなくなるからやめてよ。

優希　でも、○○○パーセントでしょ？うちの学校って多く見積もって6000人だから…

○○○の人？一人いるかないないかの確率だよ。

真亜子　そっか。そおか、安心した。

文哉　安心したら、原稿書けよ。来週までだぞ。

真亜子　わかってるよ。ちゃんと書く。

庄太郎、入場。

庄太郎　泊庄太郎、ただ今下の集積場より帰って参りましたあ！

文哉　ご苦労であった、泊隊員！

庄太郎　はっ！やっぱり地球は青かったっす！

文哉　そうか！でかした！

庄太郎　はいっ！

庄太郎、文哉と何故か感動の再会。

真亜子　青ったって、ポリバケツの青でしょ。

庄太郎　あ、真亜子来ていたのか。

真亜子　あ、真亜子来ていたのか、じゃないよ。…庄太郎、覚えてる？

庄太郎　え？

真亜子　今日の朝、自分が何をしたか覚えてる？

庄太郎　え？えーっと、朝起きて、歯磨いて、朝御飯食べて、トイレで用足して。着替えて…

真亜子　ストップ！

庄太郎 え？

真亜子 そこ、朝御飯と着替えの間？

庄太郎 トイレかい？快便だったよ。

真亜子 違う！間に抜けてるものがあるでしょ。

庄太郎 なんかししたかなあ。

真亜子 ……ヨーグルト。

庄太郎 ああ、ヨーグルトは食後に食べたけど？

真亜子 やっぱり！私のヨーグルト！

庄太郎 そうだったの？

真亜子 ひどい！勝手に食べたくせに覚えてないなんて。食べようと思ってとっておいたのに、

馬鹿！

庄太郎 ご、ごめんよ。でも、真亜子も桃缶食べたじゃないか。

真亜子 なにその謝り方！最低！誠意無さ過ぎ！そんなにヨーグルト食べたいなら冷蔵庫の

中身全部ヨーグルトにしてやるから！

庄太郎 おい、ちよっと待てよ！

真亜子 知らない！

庄太郎 そこまでヨーグルト食べたいわけでもないから！

庄太郎、真亜子退場。

一美 いつもながら些細な事で喧嘩するんですね。

文哉 夫婦喧嘩は犬も食わないって昔の人は良い事言ったもんだ。

優希 ……ん？

一美 どうしました？

優希 今の口ぶりだと、二人一緒に住んでるのかな。

一美 そうなのかもしれませぬ。

優希 より戻してそんなに経ってないのに……凄いな。

武士、入場。

武士 お、居たな。

優希 武士…。

武士 よう。

文哉 そういえば武士、原稿の事なんだけど。

武士 原稿？

文哉 そう、会報のメンバー紹介なんだけど。

文哉 ああ、俺パス。その頃にはこっちはいなくなるから。

武士 そうなのか。

武士 今日も、置いてた荷物取りに来ただけだし。

文哉 引越し決まったのか？

武士 まだ具体的には決まってるけど、来月かな。

一美 進路先は決まったんですか？

武士 さあ？まだ返事来てないけど、どうにかなるんじゃない？

くるみ星人より愛を込めて。

文哉 そう、そうなら良いけど。
優希 あのさ、武士…。
文哉 …冬樹、図書館に行こうか。
一美 そうですね、資料集めですか？
文哉 ああ。くるみ星人の特徴についてなんだけど、まだ生活様式についての記事が不足でね…。

文哉、一美退場。
間。

優希 …あのさ。
武士 何？
優希 その。
武士 用事が無いなら帰るよ。
優希 用事あるんだけど。
武士 だから？
優希 でも、うまく言葉が出てこなくて。
武士 大学を辞めること？
優希 …うん。
武士 今までありがとな。
優希 本当に辞めちゃうの？
武士 ああ。
優希 どうしても？
武士 そうだな。
優希 残るって選択肢は？
武士 あり得ない。
優希 なんで？
武士 聞いてどうする？
優希 え？
武士 聞いて、どうしたいの？
優希 どうするって…。

一美、入ってくる。

一美 すみません、忘れ物…って、やっぱりいいです。

一美、やっぱり退場。

優希 …。
武士 どのみち俺は辞めるんだから。聞いても無駄じゃないか？
優希 でも、なんで辞めるのか聞きたいよ。
武士 別に、理由なんか無い。
優希 単位取れなかったから？

武士 取れてたよ。

優希 友達出来なかった？

武士 お前らいるじゃん。

優希 大学に来たくなかった？

武士 そうでもないかな。

優希 じゃあ他の理由？

武士 かもしれないなあ。

優希 そうなの？

武士 さあ、よくわかんない。

優希 だから、もう…何なのよ！なんで？ちゃんと話してよ。

武士 …。

優希 話したくないなら、話したくないって言えばいいじゃない。

武士 お前に話したくない。

優希 そうなの。

武士 お前がそう言えって言ったんだろ？

優希 なんでそうなるの！？そうじゃないの！そうじゃなくて…。

武士 …お前のせい。

優希 え？

武士 嘘だよ。

優希 やめてよ！

武士 怒るなよ。

優希 怒ってないよ！

武士 怒ってるだろ。

優希 …武士。

武士 だから、今更理由聞いても仕方ないだろ？

優希 でも。

武士 理由聞いて、止めたいわけ？「やめないでよ、やめなくてもなんとかなるよ」って？

優希 それこそわかんないよ。

武士 だって。

優希 特別なことじゃ無い。

武士 かもしれないけど。

優希 けど？

武士 …なんで辞めるの。なんで辞める事言ってくれなかったの？なんか、悩んでたらどう

優希 して私達に相談してくれなかったの？

武士 …。

優希 嫌なことがあったとか、何か悩んでることがあったなら、独りで抱え込まないで。私

武士 でよかったら出来る限り聞けし。もちろん、真亜子とか文恵だっけきつと。

優希 何故？

武士 だって、その…私たち、友達でしょ？

間。

武士 …なんだそれ。友達だと？

くるみ星人より愛を込めて。

優希 え？
武士 笑わせるな。反吐が出る。
優希 な…。
武士 偽善者が。人を助けてる自分の姿に心底自惚れて。
優希 そんなつもりじゃ…。
武士 もういい。
優希 武士。
武士 知らない。

武士、去る。

間。

崩れる優希。その眼には、涙。

一美、入ってくる。優希、気づかない。一美、恐る恐る本を探す。

一美 …あ。

一美、ぼろぼろと服からくるみを落とす。
その音に優希、一美のいることに気づく。

一美 やだ。(拾う)

優希、一美を呆然と見つめる。

一美、意味深な笑み。

音楽と共に、暗転。

#3 会報と窓と退部届と自己中と花言葉

舞台明るくなる。文哉と優希がいる。

文哉、ホワイトボードを消して「完成！」の文字を大きく書く。

優希、椅子に座り複雑な表情。

真亜子、一美、入場し机に会報を置く。

文哉 ついに会報完成だ！

全員、拍手。

真亜子 やったー。

優希 頑張ったね。

一美 すごいですね。

文哉 これも皆のおかげだよ。

真亜子 見て良い？

文哉 もちろん。

全員、会報を読み始める。

優希 表紙、凝ってるね。

一美 あの時の色画用紙です。

優希 え…。

文哉 冬樹は己を犠牲にして色画用紙をSF研に捧げたんだよ。

一美 と言っても、大分買ひ足しましたけど。

真亜子 ねえ、最後の部分これにしたんだ。

一美 どこですか？

文哉 ああ、最後の「くるみ星人は何故地球に着たのか？」についての考察ね。

真亜子 惑星の調査ってことにしたんだ。

文哉 ま、隠れ住んでる以上、侵略説も否定できないんだけど。資料足りなかったから無難にね。

真亜子 いや、良い感じだよ。

優希 …うん、そうだね。

真亜子 …優希？

一美 (読んでみて)結構真実味ありますね。

文哉 面白おかしく書いてみただけだよ。

優希 …。

一美 いや、本当にすごいですよ。ここまで論理を展開できるなんて、素人の見解にしては良い線行ってると思いますよ。

文哉 そう？そう言ってもらえると頑張った甲斐もあるもんだ。

一美 気を付けないと。

文哉 何か言ったか？

一美 いえ。

優希 真実味、ね…。

一美 そういえば最近、真亜子さんの許婚さん見かけませんね。

文哉 鍵、新しくしたから。

真亜子 新しい鍵は教えてないもん。

一美 そうだったんですか。

文哉 まあ別に問題は無かったと思うけど。宮本が嫌がっていたから。

優希 そんな、別に私。

真亜子 ごめんね、優希。

優希 気にしてないから。

真亜子 優希の嫌がることしたなんて、私って馬鹿。いくら桃缶に釣られたからって。

優希 ホント、釣られるなんてね。

真亜子 ごめん。

優希 もう良いよ。大丈夫。大体、そもそもの原因はあっちにあると思う。

文哉 そう。小島は利用されただけ。

真亜子 そ、そうかな？

庄太郎、ポリバケツから登場。

くるみ星人より愛を込めて。

庄太郎 甘いわーっ！

真亜子 ぎゃあああ！

優希 えー！？

庄太郎 鍵如きで僕を追い出せると思ったか、真亜子！

真亜子 しつこい上にきもい！

一美 それ、臭くないですか？

優希 どうやって入ってきたの？

庄太郎 残念ながら僕の辞書には不可能の文字は載ってないんですねえ！ははは！

真亜子 …そのまま捨てていいよ。

文哉 許可入った。

一美 おりやおりや。

庄太郎 あっ、やめて！危ない！危ないから！

一美 生ごみでいいんですよね？

庄太郎 一美ちゃん、スマイル上等！でも早く助けて〜！

真亜子 全くもう。

一美、真亜子、庄太郎を引っ張る。

庄太郎、助かる。

庄太郎 この前負けた時といい、ここに来ると常に命の危険に晒されるな。

一美 自然界なんていつでも生きるか死ぬかですよ。

庄太郎 おっ、ハードボイルド。

真亜子 …何か用？

庄太郎 鍵、替えたでしょ。せっかく漫画良い所だったのに。

真亜子 …私が借りてくるから来ないでって言ったじゃない。

庄太郎 いや、やっぱりここで見るのがさ。

真亜子 言い訳無用。恥かいたわ。

庄太郎 真亜子。

真亜子 何？

庄太郎 …すまん。

真亜子 …わかれば良いけど。(優希に)ごめん、連れて帰るね。

優希 行ってらっしゃい。

真亜子、庄太郎を引き連れて出ようとする。

庄太郎 ああ、部長。お久しぶりです。

文哉 折角入ってきたのに災難だったね。

庄太郎 でもまあ、これくらいなら易しい方です。

文哉 小島はもっと激しいってこと？

庄太郎 そりゃあ、夜の方は。

真亜子、恐ろしい勢いで庄太郎を殺しにかかる。

くるみ星人より愛を込めて。

真亜子 嘘をいうな、嘘を！

庄太郎 ふえ。ご、ごめん真亜子、でもこれは大人のジョークってやつで。

真亜子 信じられない。(殺す)

庄太郎 死ぬ…。

文哉 やっぱり災難だな。

庄太郎 そうですね。

文哉 ところで会報できたんだけど、読む？

庄太郎 ええ、是非読ませてもらいますよ。実は、今度書こうと思っている話、くるみ星人を題材にしようと思っただけ。良い資料になりそうだ。

文哉 へえ、それは楽しみだ。

庄太郎 一部、頂けますか。

文哉 はい、1320円。

庄太郎 え。1320円？

文哉 どうかした？

庄太郎 …いや。

庄太郎、小銭を渡す。文哉、会報を渡す。

庄太郎 出せない金額じゃないっていうのが、また良い所ついていますなあ。

文哉 ありがとう。

真亜子 行くよ。

庄太郎 じゃあ、また。

文哉 また。

庄太郎、真亜子、退場。

文哉 あそこは、爆発しろってあんまり思わないんだよな。

一美 部長。

文哉 ん？

一美 武士君は来ないんですか？

文哉 どうだろう。最近は大学にも来てないみたいだし。

一美 そうですか、残念。

文哉 退部届けも、貰ったよ。これ。

優希 本当になくなるんだ。

文哉 そうみたいだな。

優希 …あのさ。

文哉 どうした？

優希 武士の事なんだけど。

間。

優希 皆、このままでいいの？

文哉 どういうこと？

優希 このまま、武士やめさせていいの？

一美 やめるのは本人の意思でしょう。だけど。

文哉 そうだな。本人がやめたいって言うてるのに俺たちが無理して口挟むことじゃないし。なんで皆平気なの？

優希 平気も何も、仕方ないだろ。

文哉 武士いなくなっちゃうんだよ？

優希 死ぬわけでもないし、会おうと思えば会えるじゃないか。

文哉 かもしれないけど。

優希 どうしたんだよ宮本。お前らしくないぞ。

文哉 私らしいって…なに？

優希 なにって。

文哉 私らしいってなに？なんなの？私は、私は何のためにここにいたの？武士に、なんもしてあげられなかったのに？

一美 …否定ですね。

優希 え？

一美 してあげる、なんて傲慢な言い方ですよ。…今まで一緒に楽しく過ごして来た相手が居なくなる。なんだか今まで楽しく過ごして来た時間まで否定された気持ちになる。

退学なんてされたらたまったものではないですよ。

優希 そうじゃない。

一美 相手のいない日常が想像できなくて、不安なだけですよ。

優希 やめて。

一美 今は、自分でその状況が納得できないだけ。冷静になって。もっと客観視が大事ですよ。

優希 一美、あなたに…あなたに何が分かるって言うの。

一美 わかりません。でも、今まで見てきたことから考察しただけですよ。

優希 私、そこまで思っていない。

一美 そのうち慣れます。大丈夫です、人間なんて半年で大体の臓器は代謝で新しいものと替わります。今のその感情も、リアルに覚えている脳細胞なんて3ヶ月後には跡形もなくなり思い出しに…

優希 そうじゃないの！そういう、ことじゃないの。

文哉 じゃあ、どういうこと？

優希 …理由無しに大学辞めるなんてありえないから。

一美 どうしてそれがわかるんですか？

優希 わからない。

一美 わからないんじゃないですか。

優希 …勘だけど。

一美 勘ですか。

優希 でも、絶対何かあったに違いない。そうじゃなきゃ、あんな風に…あんなこと…言えないもん。心に壁作って、絶対、武士傷ついでる。

一美 勘ですか？

優希 …勘だけど。

文哉 つまり、大げさに言えば市原を救いたいというわけか？

優希 ……そうかも。

一美 自分が無力じゃないことを証明したいだけでは？

優希 そうかもしれない。

文哉 力になれなかった自分、ね…。

一美 そんなもの、ここにいる全員同じですよ？

優希 なんだろう、自己中かもしれないけど、理由も告げてくれないで、いなくなってしまうのは嫌。知りたい。ちゃんと知った上で答えを出したいよ。

一美 自己中、ですね。

優希 そうかな。

一美 それって自分が納得したいだけでしょう。

優希 そうなのかな。

一美 人間なんて、最後は結局自分のために行動するんですよ。

文哉 一理あるか。

一美 大学辞めるのが問題じゃ無い。自分の思い通りに生きたいだけ。

優希 うん。そうか。

文哉 宮本。

優希 ……やっぱり、私ってあいつの言う様に偽善者なのかもね。

間。

文哉 いいんじゃない。

優希 え？

文哉 いいんじゃないの、自己中でも。

優希 ……。

文哉 俺も事の顛末はわからないけれどさ、でもほら、市原だって、同じようなものでしょ。

優希 自己中が？

文哉 そう。理由はどうあれ、それを告げずに去ろうとしてる。

優希 だからって、私まで自己中にならなくても。

文哉 いいんじゃない。今までやってみたことある？

優希 無いけど。

文哉 押してだめなら、引いてみるよ。

一美 毒には毒を、自己中には、…自己中ですか。

文哉 聴いてきても良いんじゃない。それこそ宮本が納得するまで。もし市原が話してくれたら、宮本が今度はわかってあげられたら、もしかしたら、退学なんてしなくて済むのかもしれない。

優希 そうなるといいんだけど。

文哉 けど？

優希 ……うん。自己中か。

優希、武士の退部届けを持つ。

次の瞬間、びりびりと退部届けを引き裂く。

文哉 優希！？

一美 何してるんですか！

優希 あ、やだつい手が滑っちゃって。

一美 うわあ。

優希 武士に、謝りにいってきます。

文哉 …やるね。

優希 自己中でしょ？

文哉 うん。

優希 頑張ってみる。

文哉 期待はしてないよ。むしろ失敗するかもな。

優希 そうだね、失敗するかも…。それでもいい。要は、自分が納得できることだから。納得できるまで、頑張ってみる。

文哉 自己中だからね。

一美 …なるほど、ね。

文哉 …なるほど、ね。

真亜子、入ってくる。

真亜子 ちょっとちょっと、良いシーンじゃないの！私も混ぜてー。

文哉 良いシーン？

優希 真亜子。

真亜子 (文哉に)ごめん、ちょっと。

文哉 うん。じゃあ冬樹、会報教室に置いてこようか。

一美 わかりました。

文哉、会報を持ち退場。

一美、会報を持ち、優希の側まで来ると。

優希 な、なに？

一美 …あなたみたいな人間、久しぶりに見ました。

優希 え？

一美 精々頑張ってくださいね。

一美、退場。

真亜子 流石部長。気が利くわー。

優希 あのね真亜子、わたし…。

真亜子 わかっている。言わなくても良いわ。

優希 え？

真亜子 言わなくても一部始終はばっちり扉にコップ当てて聞いてたんです。

優希 それって盗み聞きって言うんだけど。

真亜子 私もね、こういう時に良い小道具用意してるんだから。

真亜子、懐からススキを取り出す。

優希 …なにこれ、ススキ？

真亜子 そう、ススキ。

優希 どう使えってのよ。

真亜子 使うんじゃないの。強いて言うなら…お守り？

優希 ススキが？

真亜子 …あいつね、庄太郎が。

優希 …うん。

真亜子 普段はとんでもないやつだけど、それだけ良い事教えてくれたの。

優希 良いこと？

真亜子 花言葉。

優希 花言葉って…。ススキの？

真亜子 そう、花言葉。

優希 なんていうの？

真亜子 …「心は通じ合う」だよ。

優希 …あ。

真亜子 ね？良くない？

優希 …良くなくないかも！

真亜子 でしょ？

優希 意外とロマンチストなんだ、あの人。

真亜子 割かし、いつもだよ？

優希 屁理屈ばかりだと思ってた。

真亜子 前ね、前って言っても、ちっちゃい頃なんだけど、よく二人で遊んでた原っぱにスス

キが生えててさ。あいつ、その時ススキの花言葉を私に教えて言ったのよ。「大人に

なっても好きでいられたら、ここでまたススキ眺めよう」って。

優希 ませてた子供だったんだ。

真亜子 まあ、言うのも恥ずかしいんだけど、そういうこと。

優希 そっか。

真亜子 「心は通じ合う」だよ。

優希 それにしても、ススキ持たされる私ってシニールだわ…。

真亜子 気遣いだけでもありがたく思ってくれない？

優希 うん。真亜子もたまには気が利くね。

真亜子 いやー、そんな褒めないで。当たり前の事をしただけだし？

優希 当たり前？

真亜子 だって、私たち親友でしょ？

間。音楽。

優希 …うん。

真亜子 武士、話してくれると良いね。

優希 うん。ありがとね。

真亜子、優希にススキを手渡す。

くるみ星人より愛を込めて。

真亜子 私にも、ラーメンおごりね。つー訳でおごりおごられで。

優希 わかった。

真亜子 めっちゃチャーシュー足すから。

優希 それならこっちは辛にしてやる。

真亜子 わかってるじゃん。

優希 そっちこそ。

真亜子 食べに行こう。

優希 うん。…いってきます。

優希、退場。

真亜子 さて、一仕事終えたね。頑張った私。会報は…あ、もうないや。

真亜子、退場。

一美、間を置いて入ってくる。

一美 ……すごいですね。

一美、椅子に座る。

一美 人間って、落ち込んだり、やる気出したり。忙しい生き物ですねえ。エネルギー、無駄遣いですよ。…でもその無駄が、この星の文明レベルを高めている理由のひとつなのかな。…調査項目に加えておこう。

一美、他にもいろいろと思いついたらしい。
椅子から立ち上がり、部屋を見渡す。

一美 ……で。

間。音楽止まる。

一美 あなたならどうします？

暗転。

…終…